

世界をみつめて3

現代社会と難民問題

莊中 孝之

この夏は日本中がオリンピックに沸いた。ふだんは新聞で野球の試合結果を見る程度にしかスポーツに関心のない私でも、いくつかの競技をテレビの前で熱心に観戦した。たとえばあの競泳男子400メートル・メドレーリレーのときなど、まさに手に汗握る思いであった。そのあとの表彰式で日の丸が掲揚されて「君が代」が流れるなか、日本人選手たちに銀メダルが手渡される様子をぼんやりと眺めつつ、私はある一本のフランス映画を思い出した。

『君を想って海をゆく』(2009)というその作品の主人公ビラルは、イラクから徒歩でフランス最北端の町カレにたどり着く。少年は何としてでもイギリスに渡ろうとしている。しかし彼の前にドーヴァー海峡が立ちちはだかる。ビラルはクルド難民であり、通常のルートで対岸に渡ることはできないのだ。現在彼らに独自の国家はなく、トルコ、イラク、イランなどに分かれて暮らしている。そしてクルド人はいずれの国においても、少数民族として社会の周縁に置かれ、様々な迫害を受けている。運よく正式に移民として他国に受け入れられる者もいるが、その他の多くは命がけで不法に国境を越えていかざるをえない。

ビラルは仲間とトラックの荷台に隠れて密入国を試みたものの、あえなく失敗してしまう。そこで彼はなけなしの金をはたいて、市民プールで水泳の練習を始める。そう、彼は泳いで海峡を渡ろうと思いついたのだ。しかし水泳の経験がないビラルにとって、それはあまりに途方もない考えである。彼に泳ぎの手ほどきをする、元メダリストのシモンは冷酷に現実を伝える。「お前に冬の海を10時間泳ぎつづけるなんて無理だ」と。それでも懸命に練習を続けるビラルに、あるときシモンはその訳を尋ねる。その答えはただ「恋人に会うために」という、あまりにも単純で純粋なものだった。

そんなひたむきな少年に、シモンはいつし

か親子のような愛情を抱きはじめ、彼を自宅に泊めてやったりする。しかしこの地で難民に支援をすることは違法だ。シモンの隣人が通報したことで、彼は警察に家宅捜索を受ける。その隣人の玄関マットには、本作の原題であるWELCOMEという文字が認められる。そのショットは偽善的で排他的な社会に対する痛烈な皮肉でもあろう。そして野外で難民のために食糧配給のボランティアをしていた、彼の別居中の妻マリオンも警察の摘発にあう。次第にビラルを取り巻く状況が厳しくなるなか、恋人のミナが親の取り決めた相手と結婚させられることになる。

それを知った少年は無謀にも厳寒の海に向かっていく。目の前を巨大なタンカーが通り過ぎ、大きな波に飲み込まれそうになりながらも、少年はただひたすら泳ぐ。大河のような潮流のなかを進むちっぽけな少年の姿をとらえる上空からの映像は、運命に翻弄される彼の人生を象徴するようで特に印象的だ。そしてバックに流れる物悲しい調べは、この映画を観るものに不吉な予感を抱かせる。彼が白亜の岸壁まであと一息というところまでたどり着いたとき、イギリス沿岸警備隊の巡視船がやってくる。少年は潜水を繰り返し必死で逃げ惑うが、ついに力尽きて浮かんでこなくなる。やはり奇跡は起きなかった。

この映画は今を生きるわれわれに、様々な課題を突きつける。世界各地で紛争や迫害などのために生み出される多くの難民と、どのように向き合えばよいのか。その支援とはどのようなものであるべきなのか。日本での難民申請も次第に増えており、この人口減少社会においても、移民を受け入れていくことが不可避となってきている。オリンピックなどまったく無縁の人々が、ただ生きるために今も世界中で苦しんでいる。

しょうなか たかゆき(准教授・英文学・比較文学)